

14) 足利尊氏の歯

The Tooth of ASHIKAGA TAKAUJI

日本歯科大学東京校 新藤恵久

Yoshihisa Shindo, *Nippon Dental University, School of Tokyo*

建武2年、足利尊氏を中心とする武家政権は後醍醐帝の建武政権と衝突した。

尊氏は天皇に不満を持つ武士団を糾合して、京都に攻め上り、天皇は比叡山に落ち延びた。しかしながら楠正成の奇策にはまった尊氏軍は大敗し、ようやく赤松圓心の助力で兵庫から九州に逃れた。九州を四ヶ月で平定し軍を立て直した尊氏は再び京都へ攻め上った。

後醍醐帝に反旗をひるがえし、光明院を擁立して京都に室町幕府を開いた尊氏は、50歳の坂を越えると体調を崩すようになり、京都二条萬里小路の館で静養するようになった。

そして延文3年(1358)4月30日、54年の波乱の生涯を閉じた。

尊氏の歯は大分県国東郡国東町の仙松山・萬弘

寺に保存されている。富来家九代忠茂により伝えられたものである。箱書には「右下正中より六番目の歯牙」(通称奥歯)

延文三年四月三十日逝去 享年五十四歳 官位権大納言正二位 征夷大將軍と記されている。

歯は顕著な咬耗が見られ、う蝕は歯冠部の頬側から歯肉縁下の歯根にまで及んでいる。恐らく他の歯も同様で、歯痛に悩まされたものと思われる。

萬弘寺にある歯は、尊氏が九州にいた時に脱落か抜歯されたものか、京都でぬけたものか、または行軍中に取れたものを保存しておいて、下賜されたものか不明であるが、戦争に明け暮れるなかでは、口腔の清掃をする暇がなかったのであろう。また著しい咬耗は、政権樹立までの粗末な食事を示しているように思える。